C'n scene news

千葉市美術館ニュース「C'n」(シーン) 97号

VOL. 97

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

［編集・発行］千葉市美術館　〒260-0013 千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311　FAX. 043-221-2316　Chiba City Museum of Art　3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-0013, Japan
https://www.ccma-net.jp/
［発行日］2021年1月13日
［印刷］株式会社 エイチケイ グラフィックス

ccma_jp　@ccma_jp

CHIBA CITY 100th ANNIVERSARY

右：リュボスラウ・パリョ《僕の猫、タムタム》(部分)
2017年（スロバキア）© Ľuboslav Palo
中：田中一村《アダンの海辺》(部分) 昭和44年(1969)
個人蔵（千葉市美術館寄託）　© 2021 Hiroshi Niiyama
左：志村信裕《「影を投げる」のためのドローイング》(部分) 2020年

館長のつれづれだより　再び「みんなで一緒に美術館を楽しむ工夫」

「わたしたちの美術館では、展示室で展示作品を前にして話をすることを禁じてはいません」と、わたしはかつてC'n scene newsに書いたことがあります。この発言に対しては、賛否ともに、いろいろな反響がありました。

ニュース記事を書く以前のことですが、国内のある美術館で作品を前に学生の質問に、引率の教授が応えていたところ、それを窘め「静かに」、「君たちはどこの大学だ」と尋ねるので、都内の国立大学の美術史専攻の学生だと答えると「T大生ともあろうものが」と面罵され当惑した話を当の教授から聞いたことがあります。美術館に行きたいのだが、子供が話しかけたり、声をあげると「怒鳴る人やあからさまに不快感を示す人がいるので美術館に行きづらい」、「何とかならないか」という親御さんからの要望もしばしば耳にしています。

一方、入館者から、「人の話す声がうるさい」、「シッカリ注意して欲しい」とのクレームに悩まされ続け、いささか神経過敏になっていた都内の美術館の学芸課長が、わたしの記事を読んで「先生はわたしたちに喧嘩でも売っているのか」とさえ言っているとのことも仄聞しています。

展示室内での作品に関する会話に関しての対応を、美術館、博物館関係者の出席する会議で質しても、いまは様子をみるより方法は無いだろうというばかりです。しかし、歴史系や科学系の博物館には、あまりそのような問題は起こっていないらしく、わたしの発言を実感として捉えられないように見えました。同様に、大都市圏以外のいわゆる地方の美術館でもそのような状況はほとんど起こっていないようでした。美術館でのおしゃべりについてのクレーム、「おしずかに」が美術館における鑑賞のマナーとされるというのも、実は、都市部の美術館に限られた特殊な問題なのではないでしょうか。

新聞でも、最近は子供を連れて美術館に行きたいが、クレームのあることを考えると行き難い、利用を自粛せざるを得ないという、いわゆる「美術館難民」のお母さんたちからの不満が記事に取り上げられる機会も増え、その現状や解決策に関しての意見が述べられています。また、ごく最近、この問題を取り上げ日本ミュージアム・マネージメント学会で「美術館における＜おしずかに＞の問い直し」と題する研究発表があったと聞いています。

なぜ「子連れ」は、美術館の利用を自ら控えなくてはならないのでしょう。本来、美術館は子連れを阻む場所ではないはずなのです。この研究発表者は、そこには美術館をめぐる利用者側の意識の問題があると言います。美術館を訪れる一部の鑑賞者による「おしずかに」のふるまいの背景には、皇室や公家や大名所蔵品の貴重な宝物を拝見するという意識をいまだ伴いつつ、明治期から戦中まで大きな影響力をもった「礼法教育」と深く関係していると分析しています。そしてそれはそれらの人々の受けた学校教育を通して広く標準化されていったのであろうと指摘するのです。

今年7月にリニューアルオープンした千葉市美術館の年齢・性別入場者数にはこの度のコロナ禍の影響もあってか、ゆるやかな変化が見て取れます。館内拡張工事を機に教育普及に力を入れたこともあってか、美術館が目指していた子供連れ親子の観覧者数が明らかに増え、同時に若いカップルの来館も増加する傾向を示しています。その半面、従来、入場者の大半を占めていた、中高年層が少なくなっているのも事実です。興味深いことにそれに伴い、展示室内のおしゃべりに対するクレームも格段に減ったことを館内案内のスタッフが報告しています。

美術館もコロナ禍以降、コロナ禍以前とはその在り様を随分と変えて行くことになるでしょう。そうしたなかで多種多様な利用者のニーズを包括できる美術館における新しいあり方を、美術館側はもちろん、美術鑑賞者たる市民の皆さんも、わたしたちの文化財、わたしたちの美術館であるという強い意識をもって問い、その活用を探り、ともに協力し、親しみの持てる、よりよい市民参加型の美術館として、いま25周年を迎えたこの千葉市美術館を再構築してゆくことの重要性を、わたしはここに提言したいのです。

［館長　河合正朝］

ブラチスラバ世界絵本原画展
こんにちは！チェコとスロバキアの新しい絵本
27th Biennial of Illustrations Bratislava in Japan

今年もブラチスラバ世界絵本原画展の季節がやってきた！　2年に1回、スロバキア共和国の首都ブラチスラバで開催される「ブラチスラバ世界絵本原画展」（略称 BIB=Biennial of Illustrations Bratislava）は、世界最大規模の絵本原画コンクールです。
今回の日本巡回展では、チェコとスロバキア特集や日本代表作家の展示、さらに日本代表作家のなかから4組の作家に焦点をあてた特集展示など盛りだくさん。展覧会のみどころを章ごとにたっぷりご紹介します。

［テキスト：学芸員　庄子真汀］

展覧会担当スタッフによるみどころ紹介

第1章　チェコとスロバキアの新しい絵本

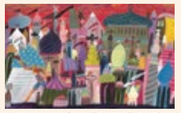
2020年、チェコと日本、スロバキアと日本は、交流100周年を迎えました。このことを記念し、BIB 2019代表作家を中心にチェコより8名、スロバキアより7名の絵本原画、そして近年両国で出版された多彩な絵本をご紹介します。原画はもちろんのこと、第1章で楽しんでいただきたいのは、チェコとスロバキアの豊かな絵本の数々。日本巡回展チームの担当学芸員が、現地や資料調査をふまえ選んだ絵本たちです。繊細なつくりやアイデアあふれる装丁を、ぜひお楽しみください。

奈良県立美術館での展示のようす

ミラン・スタリー《オオカミが食べるのは？》2017年
©Milan Starý

リュボスラウ・パリョ《僕の猫、タムタム》2017年
©Ľuboslav Paľo

第2章　BIB 2019受賞作品


ハサン・ムーサヴィー《ボクサー》2015年
©Hasan Mousavi（グランプリ）

ミョン スジョン《世界の果てまで広がるスカート》2018年
©Soojung Myung（金のりんご賞）

世界中から集まった、47か国、416組による539冊の絵本、総計3,056点の原画。そのなかから、専門家10名の審査員によって受賞作品が選ばれました。日本からは、きくちちきさんが『もみじのてがみ』で金牌を受賞しました。
第2章では、受賞作家パネルで紹介するほか、絵本もあわせて展示します。伝統や文化から派生した視点や、作り手の独創的な発想など、世界各地の絵本のイラストレーションの「いま」を感じることができるでしょう。

第3章　BIB 2019日本代表作家

きくちちき《もみじのてがみ》2018年 ©きくちちき（金牌）

日本は、第1回展よりBIBに参加し、数多くの絵本原画を送り届けてきました。第3章では、スロバキアへ送られた絵本原画たちが、日本に帰国。日本代表作家による出品作品64点を、もれなくご覧いただきます。絵本という重層的な創作物から、原画というひとつの要素を取り出して楽しむこと。あの絵本の原画だ、という発見もあれば、この原画の絵本を読んでみたい、という興味も湧いてくるかと思います。4階の「ぴじゅつライブラリー」では、日本代表作家の出品作品の絵本をすべて読むことができます。

さかたきよこ《金の鳥》2018年 ©さかたきよこ

荒井良二、きくちちき、さかたきよこ、ザ・キャビンカンパニー特集展示

きくちちき『もみじのてがみ』習作 2018年

さかたきよこ　アニメーション作品（midnight lalalala・・）と制作に使用した人形 2014年

荒井良二『山のヨーナ』原画 2018年

展覧会の最後を飾るのは、作家の創作活動の背景を深掘りする特集展示です。BIB 2019日本代表作家から、「アトリエからはじまる旅」をテーマに、4組の作家に焦点を当てます。絵本はどこから生まれるのか、そんなシンプルな問いを出発点にして始まったこの企画。4組それぞれのアトリエやよく訪れる場所などを取材し、展示に落とし込みました。
習作や資料、関連作品、特集展示のための新作など、ここでしか見られない作品も。展示方法も工夫にあふれ、みどころ満載です。原画、絵本、作家をとりまく世界が、ぐんと深まる展示になっています。

ザ・キャビンカンパニー《アノコロの国》宮殿 2013／2020年、《アノコロの国》建物 2011〜2020年

ブラチスラバ世界絵本原画展
こんにちは！チェコとスロバキアの新しい絵本
会　　期　1月5日（火）〜2月28日（日）
開館時間　10:00〜18:00
（金・土曜日は20:00まで）
休 室 日　1月18日（月）、2月1日（月）

千葉市美術館拡張リニューアルオープン・開館25周年記念／千葉市制100周年記念／川村コレクション受贈記念

田中一村展 ― 千葉市美術館収蔵全作品

（図1）田中一村《椿図屏風》昭和36年（1931）千葉市美術館蔵
©2021 Hiroshi Niiyama

2010年に千葉市美術館で開催した「田中一村 新たなる全貌」展から10年。ふたたび、田中一村展を開催！　この10年間で、千葉市美術館に新たに収蔵された田中一村の作品は、寄託を含めて100点を超えます。今回の展覧会は、それらすべての作品を一挙にお見せする、大変貴重な機会となります。展覧会の開催の経緯や見どころについて、担当学芸員に聞きました。

――まずは、展覧会の開催の経緯を教えてください。
2010年の「田中一村　新たなる全貌」展は、一村にゆかりのある地方の公立美術館の学芸員と共に一から行なった調査・研究の成果として、全国から作品を集めて開催した大規模な回顧展でした。その結果、大きな反響があり、千葉市美術館へ一村作品や資料の寄贈・寄託の申し出をいただくようになりました。2年前には、一村の生涯にわたって一番の支援者であった千葉の川村家に残っていたコレクションをまとめて寄贈・寄託いただき、すべてを紹介するには所蔵作品展としての特集展示を開くしかない、前の展覧会からちょうど10年でもありこれは機会が来た、ということで開催することとなりました。

――一村は、栃木で生まれ、東京、千葉、奄美と暮らしたそうですが、千葉にいたころの作品が多く寄贈・寄託されたのでしょうか。
東京で神童と呼ばれていたころの作品から、奄美で亡くなる前年に描いた作品まで、全時代の作品があります。個人の家での鑑賞にふさわしい作品が主ですが、特徴としては、なにか思い入れがあって長いあいだ手元に保管されていたもの。また、あまりスポットの当たっていなかった若いころの作品があります。一村と関係を持った人がこれほどたくさんいて、一村がその人たちに支えられて生涯描き続け、いわゆる画壇には出ずともプロの絵描きとして70年を生きたことがよくわかる資料群になっています。

――とくに、川村コレクションの寄贈・寄託は大きなできごとでした。
川村家は評伝には名前が出て知られていますが、今回「川村コレクション」として収蔵したことで、どういった作品を川村家宛てに制作し、残していたかを具体的にお示しすることができます。こういった情報は、作品の内容と非常に関係があり重要なことです。千葉の風景を数多く描き残していたり、デザイン的な仕事でも、時間をかけて一生懸命取り組んでいるんですね。その時々の最高の出来栄えのものを川村家に残そうとしていて、画家としてのプライドもひしひしと伝わってきます。

――2010年の「田中一村　新たなる全貌」から、なにか新しい発見などはありましたか。
2010年の展覧会のときに作成したカタログ・レゾネに掲載した作品数は583点でした。いまでは約700点も一村の作品として認めることができると思いますが、それはすべて新しい発見です。その多くは、若き日の作品です。今回出品される作品は、2010年の展覧会には出品されていないものがほとんどなので、前回以来という方は、初対面の作品も多いのではないでしょうか。

――それらの作品は、どのような展示構成で紹介される予定ですか。
やはり一村の生涯を辿るかたちで構成します。一村は、生涯描き続けたことが作品からわかり、画風もさまざまに変遷し、人生の紆余曲折まで作品を通して如実に伝わってくる作家です。今回の特徴としては、昭和初期の千葉に来る前後の作品を、転換期として一章立てています。このころの作品や状況は、これまでよくわかっていませんでした。2010年の展覧会の成果のひとつとして、新しい作品がいくつも出てきたので紹介します。

――資料も数多く出品されるそうですね。
たとえば、写真もいくつか展示します。新しく見つかった、一村が撮影した千葉の風景写真もあります。戦前の早い時期から、画家として新しいメディアを気にかけていたようです。指摘されてきたことですが、一村の作品にみられる光や影のとらえ方や画面のトリミング、遠近の構図などには、写真的感覚があります。また、没後の鑑賞史を俯瞰すべく資料も紹介する予定です。無名のまま亡くなり、没後にメディアを通してこれほど爆発的に有名になった作家は、ほかにはそういません。そういった激動の鑑賞史を、本やチラシ、ポスターなどで見ていただこうと思っています。

――最後に、ぜひ見ていただきたい作品がありましたら教えてください。
まずは《椿図屏風》（図1）ですね。近年見出された転換期の力作です。一村は当時22、3歳、そのころにこのような作品を描けていたことを、ぜひ知っていただきたいです。画風の転換のなかでも、大きな山のひとつです。そしてもちろん、《アダンの海辺》（図2）も、あらためて間近でご覧いただきたい代表作です。展覧会の流れも、この作品を描くまでの道のりを辿るといった趣になると思います。一村が、いかに支援者やまわりの人たちと関係を築き、《アダンの海辺》を描き上げ、画家としての一生を全うしたか。ぜひ、実物の作品のある空間で感じていただきたいと思っています。

［話し手：上席学芸員　松尾知子］

田中一村展 ―千葉市美術館収蔵全作品
会　　期　1月5日（火）〜2月28日（日）
開館時間　10:00〜18:00
（金・土曜日は20:00まで）
休 室 日　1月18日（月）、2月1日（月）

（図2）田中一村《アダンの海辺》昭和44年（1969）
個人蔵（千葉市美術館寄託）　©2021 Hiroshi Niiyama

つくりかけラボ　02

志村信裕｜影を投げる

作家や作品を深掘りする「つくりかけジャーナル」に注目！

《赤い靴》2009年 photo: Kumi Ohiwa

拡張リニューアルオープンで新設された子どもアトリエで開催される「つくりかけラボ」。1月5日がらは「影を投げる」が始まります。志村信裕さんは、千葉県在住の現代美術家。「五感でたのしむ」をテーマに、空間全体を新たな作品としてつくりかえます。

まだ見ぬ作品への期待や想像をふくらませてくれるのが、「影を投げる」オリジナルの取り組み**「つくりかけジャーナル」**。作品の構想や制作への思いを知ることができる、志村さんへのインタビュー企画です。

「つくりかけラボ」は、展示が始まるまで、どのような空間が立ち上がるかわかりません。展示が始まってからも、訪れた人々との関わりによって変化していくため、空間はつねに「つくりかけ」です。そんなプロジェクトだからこそ、このようなインタビュー企画が、ひとつのメディアとして作品を支えていくことになるでしょう。

ここでは、「つくりかけジャーナル1号」から、展覧会にまつわる部分をご紹介。全文は、ぜひチラシ中面よりお読みください。

つくりかけジャーナル1号：影を投げると何が起きる？　アーティストが「映像」に感じる可能性

※「つくりかけラボ02 志村信裕｜影を投げる」チラシ中面「つくりかけジャーナル1号」より引用
（聞き手：千葉市美術館 学芸員 畑井恵　話し手：志村信裕）

――「影を投げる」とは印象的なタイトルですね。どんな意図を込められていますか？
僕としてはそんな突飛なタイトルをつけたつもりではないんです。自分がやっていることを分かりやすく共有したいと考えたときに自然と出てきた言葉で。これまで映像をスクリーンだけでなく、さまざまな物や場所にプロジェクションする作品をつくってきました。プロジェクションは日本語で「投影」、つまり「影を投げる」と書きます。

――アートで映像を扱う方法はいろいろあると思いますが、プロジェクションを用いる理由は何ですか？
そうですね、例えば僕は作品でモニターを使いません。あくまでも映像を投影して、イメージが反射するということがすごく重要だと考えているからです。モニターはそのサイズ以上にはならないし、イメージを正確に伝えることが役割の道具だからエラーみたいなことが起こらないんですよ。一方、プロジェクションではちょっと投影方法を変えるとエラーが起こる。それはエラーなんだけど、変になっちゃうこと自体も面白くて毎回驚いています。

――つくラボで予定している「ダイレクト・プロジェクション」も映像の面白い使い方ですよね。
会期中は、野菜の皮やカラーセロハンなどの身近な素材を使ってスライドを手づくりして、つくラボにある投影機で直接映せるようにします。「ダイレクト・プロジェクション」自体はイタリアのデザイナー、ブルーノ・ムナーリが書籍『ファンタジア』で紹介している手法を参照させてもらいました。参加者が「影を投げる」ことを体験できて、映像とは何かを考えられるとてもいい方法だと思います。

――滞在中、ワークショップの他にはどんなことをしようと考えていますか？
アーティストが美術館に滞在するのっていい試みですよね。つくラボの場合は訪れた人が制作現場を覗けるだけでなく、自由に参加までできるということが楽しみです。僕は、ラボをアトリエのようにして映像を撮ったり、編集したり、つくりかけの映像をラボ内でプロジェクションしてみたりしながら制作する予定です。今までにやりきれなかったことに挑戦できるような機会にしたいですね。

「つくりかけジャーナル」は、会期中に2号、3号を発行予定。続きをお楽しみに！

《「影を投げる」のためのドローイング》2020年

つくりかけラボ02　志村信裕｜影を投げる
会　　期　1月5日（火）〜4月4日（日）
開館時間　10:00〜18:00
（金・土曜日は20:00まで）
休 室 日　2月1日（月）、3月1日（月）
会　　場　千葉市美術館4階 子どもアトリエ
観 覧 料　無料

▶「つくりかけラボ」とは？
「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間を作り上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。いつでも誰でも、空間が変化し続けるクリエイティヴな「つくりかけ」を楽しみ、アートに関わることができる表現の場です。

次回展予告

2021年3月6日（土）〜3月26日（金）　「第52回　千葉市民美術展覧会」
千葉市美術館所蔵品による「房総ゆかりの美術」

2021年4月10日（土）〜7月4日（日）　千葉市制100周年記念
「大・タイガー立石 POP-ARTの魔術師」

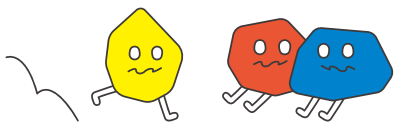
2021年4月15日（木）〜7月4日（日）　「つくりかけラボ03
武藤亜希子｜C+H+I+B+A ART シェアばたけ」

タイガー立石《富士のDNA》1992年 courtesy of ANOMALY

美術館の仕事を紹介します！

その11 びじゅつライブラリーの運営

「びじゅつライブラリー」、通称“びブラリ”は拡張リニューアルオープンで4階に新しくできた図書室です。子どもから大人まで、美術に初めて触れる方から美術をもっと詳しく知りたい方まで、さまざまな方々に楽しんでいただけるよう、工夫をこらして選書した4,500冊が並びます。
びブラリでは、本の整理・整頓を始め、日々新しく届く本や資料を登録し配架しています。図書室を運営するために、さまざまな作業、活動がありますが、今回は主なものをご紹介します。



（キャラクターデザイン：KARAPPO）

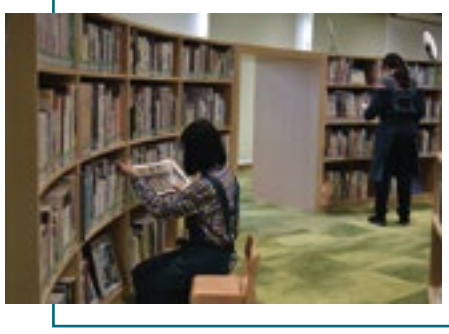
本の整理・整頓、消毒

返却カートに戻していただいた本は、利用者のみなさんが探しやすいように元の場所へ戻します。新型コロナウイルス感染防止対策として、読み終わった本の消毒も毎回行っているので、安心して閲覧してください。

新規図書の登録、配架

美術館には毎日、本や資料、雑誌が届きます。これらをすぐに閲覧できるよう、分類して登録、配架しています。美術館は美術作品だけではなく、本もたくさん所蔵しています！

蔵書点検



本がどのような状態か、決まった配架場所にあるのかなどを毎月１冊１冊丁寧に、点検しています。そのあとは今月のテーマ・季節の絵本を選んで模様替え！

室内POPの作成

展覧会にあわせた POP やお知らせしたいことを制作しています。びブラリキャラクターにもご注目！

関連図書コーナーの設置

もっと展覧会が楽しめるように、企画展・常設展・つくりかけラボにまつわる本をピックアップし、コーナー展示しています。今回は BIB 展の絵本がたくさん届きました！

びじゅつライブラリーおすすめ本紹介コーナー
本をみる、美術をよむ vol.2
今回のテーマ：ブラチスラバ絵本原画展特集！

絵本原画展ときたら、びじゅつライブラリーの出番！　会期中、びじゅつライブラリーでは、ブラチスラバ世界絵本原画展に関連する本を数多く配架しています。ここでは、そのなかから選りすぐりの6冊をご紹介します。ぜひ展覧会とびじゅつライブラリー、セットでお楽しみください。

日本代表作家の絵本

きくちちき　『もみじのてがみ』（BIB 2019金牌受賞）

むこうの山のつぐみが、真っ赤なもみじをくわえてやってきた。それは冬の訪れを知らせるたより。受け取ったねずみは、りすとひよどりといっしょに、こっちの山のもみじを探しにでかけます。きくちさんらしい墨と水彩の自由な表現が楽しく、そして美しい1冊。

さかたきよこ　『金の鳥』

お城に植わった金のりんごをついばむ金の鳥を追いかけ、3人の王子は旅に出ます。末の王子は、ぶじ金の鳥を探しだすのですが……。ブルガリアの昔話を再話した、さかたさんが国内ではじめて手がけた絵本。繊細で幻想的なイラストレーションは、展示室で原画を見たくなります。

チェコやスロバキアにまつわる本

出久根育
『チェコの十二ヵ月　おとぎの国に暮らす』

BIB 2003にて『あめふらし』でグランプリを受賞した絵本作家・出久根育さんによる、チェコでの生活を綴ったエッセイ集。2002年からチェコ・プラハに住む出久根さん。文化や暮らしに焦点をあてた言葉からは、現地のようすが目の前に立ち上がってくるようです。

中村祐子
『ツィパールの世界　スロバキアを訪ねて』

BIB 2019にて、スロバキアのイラストレーションへの貢献にたいして贈られる「ポスト・バンク賞」を受賞したミロスラフ・ツィパール。十数年にわたってツィパールと親交のある中村祐子さんが、その交流のようすやスロバキアでの体験を綴っています。

国際アンデルセン賞・画家賞 歴代受賞者の絵本

安野光雅　『ふしぎなえ』

日本の作家で、これまで国際アンデルセン賞・画家賞を受賞しているのは、赤羽末吉と安野光雅さんの2人です。『ふしぎなえ』は、安野さんのデビュー作。上ったり下ったり、ぐるぐる回ったり逆さまになったり、ふしぎな世界に迷いこんで抜け出せない1冊。

クヴィエタ・パツォウスカー
『あか あお きいろ、色いろいろ 色であそぶ本』

クヴィエタ・パツォウスカーはチェコの絵本作家。鮮やかな色使いやダイナミックなデザインを特徴とし、立体作品なども手がけています。この本は、色に着目した”しかけ絵本”で、円盤を回したり、穴の空いたページをめくったり、あそびがたくさん。